

石斛と木斛

夏井 高人

1 考えるきっかけ

明治大学のリバティアカデミーで一般・社会人向け教養文化講座の一つとして、関係各位の多大なご協力得て、『ランの世界』という講座を開設・運営してから数年を経過した。幸いなことに好評を得ることができ、2013 年度も開講することとなった¹。2012 年度の講座内容の中から選抜された 4 つのテーマによる論説を収録したリバティアカデミーブックレット『ランの世界』が 2013 年 3 月末ころに出版予定で、目下、その校正・印刷作業が最終段階に入っている。

この講座は毎年 10 回前後の異なるテーマの講話によるオムニバス形式となっているのだが、2012 年度の講座では、東京山草会らん・ゆり部会の重要メンバーの一人である大橋秀昭氏による「日本の蘭栽培の歴史」というテーマによる講話があり、とても勉強になった²。私は、この大橋氏の講話を聴講したことを契機とし、刺激を受け、ラン科植物について書かれた内外の古文献に興味をもつようになった。目下、日本の野生植物について書かれた代表的な古典文献の幾つかを読んでいるところだ。

そのようにしている間に、ラン科植物の現代和名と古名とが異なっている場合があることが結構たくさんあることに気づいた。例えば、セッコク (*Dendrobium moniliforme*)³ を例にあげると、「セキコク (石斛)」、「セキコク (石穀)」、「セキラン (石斛)」、「セキラン (石蘭)」、「イハクスリ (伊波久須利)⁴」、「スクナヒコクスネ (須久奈比古乃久須禰)⁵」、「スクナヒコノクスリ (須久奈比古乃久須利)」、「ミタカラ (美太加良)⁶」と言ったような

名前と呼ばれている例がある⁷。「セキコク」は「石斛」の古い時代の読み方そのままなのだろうと推定され、これがなまって「セッコク」となったというのが通説的見解なのだが、美濃では古くから「セッコク」と呼ばれていたようだ。要するに、「石斛」の読み方として「セキコク」と「セッコク」の2通りがあるのだけれども、一般に「セッコク」のほうが「セキコク」よりも発音しやすいために、「セッコク」の名のほうが普及してしまったということなのではないかとも想像される。

ところで、日本に自生する植物の中に「木斛」がある。現代和名としては、「木斛」とはツバキ科に属し小さなクリーム色の花を咲かせる木本植物であるモッコク (*Ternstroemia gymnanthera*) を指すものとされている。日本の古文獻においても、通常はそのようにして扱われている⁸。

ところが、古文獻の中には、明らかにセッコク (*Dendrobium moniliforme*) を意味するものとして「木斛」や「モッコク」等の語を用いているものがある⁹。文脈や内容等から「木斛」と記されていても「石斛」のことだと理解できる場合には比較的問題が少ない。しかし、単に「モッコク」とのみ記されている場合、そのどちらを意味するのか必ずしも明確ではなく、文書中の文脈や論理関係等から推測せざるを得ないことが多々ある¹⁰。事情は中国でも同じようで、中国の古今の文献を読んでも、おそらく「木斛」の同定に関する見解の相違や誤解等に基づく混乱が若干見受けられるようだ。

こうした中で、江戸時代に豆州（伊豆）の物産（産物）を調査した結果を記録した文献の中に、ラン科植物である「石斛」を指すものと明示して「木斛」の記載があるものを見つけた。『豆州諸島物産図説』及び『豆州志稿・卷七』の中にその記載があるので、石斛及び長生蘭愛好家の参考になるのではないかと思われるので、以下、記述を現代漢字文に改めた上で資料として紹介しようと思う。

2 豆州諸島物産図説

『豆州諸島物産図説』は、豆州（伊豆）の物産帳（享保～元文ころ）を基礎として田村元長により編纂されたものとされている。内容的には、主として伊豆諸島の物産（産物）の記録ということになるが、当時の伊豆諸島における風俗や民俗等についての記述もあり、歴史資料としての価値の高い文献の一つなのではないかと思われる。

『豆州諸島物産図説』の中には、「木斛」の項がある。

木斛

一種木斛八丈島水海山ミツミヤマ古木上ニ生ス 土名カラランジ此即チ石斛ノ木上ニ生スルモノナリ
善之按本草云石斛短而中實木斛長而中虚ト 八丈島ノ木斛ハ中實シテ稍石斛ニ近シ 石斛乏キ時代用テ可ナルベシ

ここに書かれていることは、概ね次のようなことだと思われる。

木斛

木斛の一種が八丈島水海にある古木の上に生えている。現地の名称から推察すると、これは石斛が樹の上に生えているものである。

検討してみると、本草にいう石斛は短く中空ではないのに対し、木斛は長くて中空となっている。八丈島の木斛は中空ではなく石斛にやや近い。石斛が欠乏したときはその代用品とすることができる。

3 豆州志稿・巻七

『豆州志稿』は、秋山富南によって寛政元年（1789）から約12年をかけてまとめられたもので、全13巻という大変な労作¹¹。長らくごく一部の人々しか読むことのできない文献の一つだったが、現在では国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで読むことができ、写真の複製（PDF）をダウンロードすることもできるようになった¹²。その第7巻に「木斛」の記述がある¹³。

石斛 木斛

時珍曰石斛短メ而中實ス木斛長而中虚ス 甚易シト分別 所在岩上石上ニ叢生ス 石斛ハ諸山アリ 近年本郷村ヨリ少ナク貢ス 木斛ハ未ダ的ニ知リカタシ

ここに書かれていることは、概ね次のようなことだと思われる。

石斛 木斛

李時珍は、石斛は短くて中空になっておらず木斛は長くて中空になっていると述べている。区別は非常に容易である。岩上や石上にあつて叢生する。石斛は幾つかの山にある。近年、本郷村から少ない分量が年貢として納められた。木斛については、確実なところはまだわからない。

4 残された謎

以上2つの文献では、明の李時珍が編纂した『本草綱目』にある「石斛」と「木斛」の解説に依拠し、伊豆地方で「木斛」と呼ばれていた植物について、ラン科植物であるセッコクが岩ではな

く樹木に着生したもののことを指すとの解釈がなされている。

『豆州諸島物産図説』では、伊豆諸島・八丈島にある水海山の樹木に生えていたものを「木斛」であるとしつつも、茎が中空ではなくつまっていることから「石斛」に近い植物であると同定している。要するにセッコク (*Dendrobium moniliforme*) の一種であったらうということは疑いないのだが、当時、「石斛」は山地の岩上などに生えるものと一般に信じられており、樹木に着生するという知識・観念がほとんどなかったということを示唆するものとして興味深い¹⁴。

他方、『豆州志稿』によれば、伊豆半島にあるものは「石斛」のみであり、本草における「木斛」を見つけることができなかったようだ。

そこで、『本草綱目』の該当場所を探してみると、草部第二十卷草之九石草類の「石斛」の項には「石斛」と「木斛」について次のように書いてある（下線は筆者が付加）。

別録曰石斛生六安山谷水旁石上七月八月采莖陰乾弘景曰今用
石斛出始興生石上細實以桑灰沃之色如金形如蚱蟻脾者佳近道
亦有次於宣城者其生櫟木上者名木斛其莖至虛長大而色淺不入
丸散惟可為酒漬煮之用俗方最以補虛療脚膝

ここに書かれている「石斛」と「木斛」の識別点は、『豆州諸島物産図説』と『豆州志稿』に書かれていることと同じなのだが、問題は、「木斛」の茎について「其莖至虚，長大而色浅。」とあることだろう。『豆州諸島物産図説』と『豆州志稿』では「中虚」となっているところが『本草綱目』では「至虚」となっており、『豆州諸島物産図説』と『豆州志稿』では「長而」となっているところが「長大而色浅」となっている。

要するに、『本草綱目』における「木斛」とは次のような植物のことを指すものと思われる。

- ① 石斛 (*Dendrobium*) の一種
- ② 樹木に着生する
- ③ 矢 (茎) がかなり長い
- ④ 矢 (茎) が泥軸ではなく淡い色をしている
- ⑤ 矢 (茎) が次第に中空になる (生薬にするため乾燥させると中空になるとの意味か?)

これらの条件に合致するデンドロビウム属ラン科植物が存在するのかどうかよく分からないが、矢 (茎) が中空との点を除くと、日本にあるデンドロビウム属植物では、オキナワセッコク (*Dendrobium okinawense*) とキバナノセッコク (*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*)) であれば比較的長くなるので、どうにか該当しそうな感じはする (正確には、セッコクの中にも矢 (茎) が長くなるタイプのものがある。)

ただ、オキナワセッコク (*Dendrobium okinawense*) とキバナノセッコク (*Dendrobium catenatum* (Syn. *Dendrobium tosaense*)) は、いずれも伊豆地方には自生・分布していない。

また、『本草綱目』では「石斛」の花の色は金色 (輝かしい黄色) としており、台湾と中国には確かにそのような美しい色の花を咲かせる石斛 (*Dendrobium*) の仲間が何種類か存在する。しかし、日本には黄花のセッコクはあっても、金色 (輝かしい黄色) の花を咲かせるセッコクは存在しない。そのことからすれば、そもそも『本草綱目』における「石斛」と「木斛」の区別をそのまま日本に持ち込むことは非常に危険なことだと思われる。

このように文脈上あるいは植生分布上の問題等が多々あるけれども、「残された謎」として問題の解決を他の専門家の方に譲ろうと思う。

[注記]

- 1 ランの世界 ―その魅力・希少種の保護・鑑賞と栽培―
<https://academy.meiji.jp/course/detail/1038/>
- 2 大橋氏のリバティアカデミーにおける講話内容を含む詳細な論説が東京山草会ラン・ユリ部会『小型野生らんを楽しむ』（柘の葉書房，2012）65～70頁に収録されている。
- 3 日本において、「石斛」という名のラン科植物の学名として「*Dendrobium moniliforme*」をあてるようになったのは、飯沼慾斎『草木圖説 草部』に「(十六) セキコク (Sekikoku; *Dendrobium moniliforme* Th.) 石斛 (通名)」と記載された頃以降のことではないかと思われる。中国では、より広くデンドロビウム属 (*Dendrobium*)、ブルボフィルム属 (*Bulbophyllum*)、フォリドータ (*Pholidota*) 等に属し、漢方薬である「石斛」の原材料となる植物全ての総称として「石斛」を用いてきた。そのため、各種石斛を識別するために、「石斛」の前に何らかの形容詞を付して種名 (中国名) とするのが通例となっている。例えば、日本のセッコク (*Dendrobium moniliforme*) は、中国名では「細茎石斛 (xi jing shi hu)」となる。読んで字の如しとの印象を受ける。
- 4 「イハクスリ」とは「岩薬」を意味するものと思われる。
- 5 「クスネ」とは「薬根」を意味するものと思われる。
- 6 「ミタカラ」とは「御宝」を意味するものと思われる。
- 7 仁井田南陽 (好古)『紀伊国続風土記』(1839)中の「石斛」の項など参照。
- 8 ツバキ科植物であるモッコク (*Ternstroemia gymnanthera*) の中国名は「厚皮香 (hou pi xiang)」となっており、「木斛」ではない。
- 9 前掲『紀伊国続風土記』の「石斛」の項にも「木斛」に関する記載があり、「延喜式貢薬中に紀伊國木斛廿五斤石斛二斤五両とある。二種共に牟婁郡深山中に産す。殊に三前郷相瀬村の大石上には黄，白，紅，淡紫の数種を産す」との趣旨の記載がある。
- 10 例えば，小花作之助『小笠原風土記略』(1862)中には「モツコク」との記載があるが，この「モツコク」なる植物がラン科植

物であるのかツバキ科植物であるのかを判別することができない。

11 郷土史の原典 『豆州志稿』

三島市市政情報，地勢・歴史，歴史の小箱第6号

<http://www.city.mishima.shizuoka.jp/ipn001750.html>

12 豆州志稿.巻之七（栄樹堂版）

<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/765146>

13 内閣文庫 173.143 の版のものに依った。

14 同様の例は現代でもないわけではなく，非常に希少とされているラン科植物が実際には目の前にある樹木に着生していても，まさか樹木の幹や枝に生える植物などなかろうと信じている人にとっては，可視光線情報としては眼球に届いていても，意識の問題としては全く認識されないで終わるということが普通にある。そのため，わずかな特徴や変化でも敏感にとらえ，ラン科植物の所在を見つけ出す視覚的・認識的能力が著しく長けている人のことを（尊敬の意をこめて）「蘭目（らんめ）」と呼んだりすることがある。